

「作者の表現から学んだこと」

私は、作者のわかりやすくする工夫をたくさん見つけました。その中で一番印象に残っているのは、「河鹿を登場させる場面」です。

河鹿はいくつかの場面に登場しました。初めの一場面では、静かな状況ということと登場しました。主人公が考えごとをしながら釣りをしているというところを強調させるように設定されています。次の二場面では、一場面とは対照的に、興奮している気持ちを強調するように設定されました。そして、最後の七場面では、別れを惜しむ二人の気持ちを、河鹿によって表現していました。

このように、同じものでも、表現のしかたによって全く違う情景になることが分かりました。登場人物の気持ちや、またはその背景など、さまざまな場面で活用されていることも分かりました。それを活用すれば、もっと読者に伝わりやすい文章になるということを学びました。

青谷有梨さん

私がこの「盆土産」を読んで、一番印象的だったのは、ドライアイスの説明の表現でした。ドライアイスという物を、違う角度から多面的に見て、読者に分かりやすかったです。ドライアイスを「ぶつかき氷」や「砂糖菓子」と表現して、いろいろなたとえを使っていました。

もし、このドライアイスを「盛んに湯気を吹き上げる氷」と見たままの表現で表すと、ドライアイスの詳しい形や、色は透明なのか、違う色なのか、またどのような状態なのか伝わりにくいと思います。この作者は、一つの物体をいろいろな物や事に例えているので、様子や形がより詳しく理解できます。

これからの国語の時間で、文や説明を書いたりするとき、この作者から学んだ、一つの物体を違う方向から見たり、たとえを上げることを使っていき、より良い文がたくさん書けるようにしたいと思います。

武井日佳理さん

作者は、読み手により分かりやすく、より印象に残すために、登場人物の個性や登場するタイミングを変え、また、登場したときの情景を重ね、伝えている。

例えば、私が最も心に残った墓参りの場面では、祖母と姉と主人公から離れ、崖の上で独りたばこをふかす父親の姿がありました。そこから、父親が家族を幸せにできなかった責任とそれから逃れるような態度がうかがえます。

このように、作者の表現方法には、さまざまな工夫が見られます。

私は、この作品を読んだとき、家族のきずなを感じさせられ、本当に感動しました。ですが、このように感じたのは、きつと作者の技法が天才的だったからでしょう。

これからもし物語を書くようなことがあれば、きつと参考にするのではないでしょうか。

木許有美さん

作者は、読み手により分かりやすく、より印象的に表現するために、その場面にあった特徴を持つ新しい登場人物を出したり、登場人物のいろいろな思いを表すために深い行動をさせたりといったように、登場人物を巧みに使って表現をした。

さらに作者は、印象的に表現するために、その場面ごとの情景を大切にしている。このことが一番分かるのは、主人公と父親の別れの場面の送る前で、「河鹿が鳴き始めていた。」のところ、河鹿の鳴き声が聞こえる方が静かという寂しさを印象的に伝えているのが分かる。

僕は、作者が作った情景などを使った巧みな技術に入ってしまったので、こんな表現が使えるようになりたいと思います。

飯田優真くん